

- 1 バラストを注ぐごとき酌初明り
- 2 亡き星の遺産に生きて初湯かな
- 3 両親の時給に差あり雪雫
- 4 黄水仙葉を切られたる断面や
- 5 糸ほどの芯の凍れる壬生菜かな
- 6 永き日や架空の獣に誰も遭はず
- 7 傾ける電車に土筆もちてゐる
- 8 夢にても聾となりけり木の芽時
- 9 遠足や牛に酔昆布食はれけり
- 10 唇を読ませてもらふ春疾風
- 11 鳥曇振り返り振り返りあるく
- 12 石垣の斜りをくだる雀の子
- 13 古雛の頭のかたちを知つてをり
- 14 返り血を英語で云へば長し春
- 15 ふらここに載らぬ部分の重さかな
- 16 脳に脈乱れうちたり春の雪
- 17 春眠や石を内より圧すちから
- 18 京都市バス西二系統朧月
- 19 輪郭を保ちて見たり夕桜
- 20 青き踏む筆談に綺麗事ばかり
- 21 満天星の踏みとどまれる枝の先
- 22 桜湯や翻る王の白き婚
- 23 猫←車↓蛙←猫←車↓の夜道かな
- 24 昼風呂にしやぼん玉液減りはやし
- 25 てのひらに指もて書かる薄暑かな
- 26 この虹の滞空時間遅刻せよ
- 27 豌豆や育たぬ豆のための部屋
- 28 鳶の巢の底を見上ぐる船遊
- 29 みどりごの回すあしくび青葡萄
- 30 歩みきて片陰川に取られけり
- 31 海を知るための器官生るる五月
- 32 枯れたるは高さ控へて杜若
- 33 青髭の城とふ虎穴水中花
- 34 ぼうたんや高架線作業員走る
- 35 稲妻の光も借りて喧嘩かな
- 36 噴水や人工内耳を断りぬ
- 37 庇はるるほどに逃げたき遠花火
- 38 見せてもよきところは透きて目高をり
- 39 手刀に豆腐を断つや雲の峰
- 40 川床やいまだ名画座残る地図
- 41 岡惚れは側雷に打たるるごとく
- 42 兜虫ラケットに来てしがみつく
- 43 一人には遺作となりし夏ドラマ
- 44 舟歌に櫂を挿したき蜥蜴かな
- 45 蜘蛛の背を見守り腹を見送りき
- 46 青葉木菟空耳を幻肢痛として
- 47 夏シャツのほんたうに警官だらうか
- 48 動物園の匂ひのくすり土用東風
- 49 蜘蛛の子の地面に着けば迷はざる
- 50 静脈の肌押し上げて奔る喜雨

- 75 理論上交はらぬ二線敷松葉
- 74 廃星を決むる権限九月尽
- 73 さかのぼつて無罪といふも蔓たぐり
- 72 月光にこゑの高低見積りぬ
- 71 鍵盤の象牙の干割れ柿紅葉
- 70 貰ひ物弁当に持ち夜学かな
- 69 カーテンを潜り秋風かほの高さ
- 68 木犀は夜半水棲となる木らし
- 67 夜光貝には緑の卵子秋の虹
- 66 秋の蚊を鏡のなかに追ひ詰めき
- 65 ひと房の巻き髪冷ます竹の春
- 64 鹿を追ひ鹿より逃げて泣く子かな
- 63 草深野見切りの早き秋の蜂
- 62 アフリカの曼珠沙華いと気さくなり
- 61 側溝へ団栗の夭折つづく
- 60 戸棚より落ちて割れざる秋の皿
- 59 隣人が消えてその猫と朝顔
- 58 桐一葉ひと抱くとき死角増ゆ
- 57 おほかたを諦め了へし秋日傘
- 56 つぶらなるハイエナの眼や秋出水
- 55 蒲の穂や立ちながら海に洗はれて
- 54 草いきれ一日を九十円で過ごす
- 53 蚊帳に入るやすやす罨にかかるごと
- 52 中身なき方が蓋なる炎暑かな
- 51 前篇を買ひし夜店の中篇よ
- 76 キンドルを掲げて照らす小夜時雨
- 77 泣く男そのままにして冬銀河
- 78 嘴をしきりに洗ふ鴨のゐて
- 79 絨毯の毛並み撫でつつ話すひと
- 80 長靴の共食ひ見たり冬の浜
- 81 冬霞赤子あたまに毛玉もつ
- 82 闇汁をかきまはしては校歌かな
- 83 布燃して組成をたしかむる冬至
- 84 残雪のあればあるほど広き国
- 85 救急車のちひさき椅子に冬帽子
- 86 喪中にも圏外ありて賀状書く
- 87 雪折や鶏卵を喰ふ鯉二匹
- 88 遺品なる冬着より削ぐ釦かな
- 89 雪沓や突き飛ばされし子の笑ふ
- 90 星による星の紹介虎落笛
- 91 短日や疾走ののち肺乾く
- 92 オブラートをパイに敷くなり冬館
- 93 すり硝子色の兎のひげ拾ふ
- 94 影法師の先まで見送る冬木立
- 95 狐の齒触れしは骨の温度かな
- 96 下鴨の森の深さやクリスマス
- 97 聖書より讚美歌うすし年の市
- 98 歴史書に縮尺さまざま鐘氷る
- 99 いま抜きし鋌跡いづこ大晦日
- 100 ひばり印スプリングホック春隣